

# 總務文教常任委員會資料

平成28年3月2日

教 育 委 員 会

## 目 次

1 教職員海外視察研修について ······ P. 1

2 小中一貫教育研究会の最終報告について ······ P. 3

※【資料1】教職員海外視察に係る校内授業研究会実績報告（別冊）

## 教職員海外視察研修について

### 1 目的

市内教職員をICT教育や外国語教育等に先進的に取り組む韓国へ派遣し、実際の教育活動を視察することにより、国際的な視点を鑑みた教育の推進及びグローバル化に対応した教育の更なる強化に資する。

### 2 実施日

平成27年11月26日(木)～平成27年11月28日(土)

### 3 参加者数

全16名(校長3名、教頭1名、教諭9名、市教委事務局3名)

### 4 観察内容

#### (1) 大邱教育大学附属小学校

- ① 全クラスの授業を参観し、電子黒板等のICT機器を活用した授業を参観した。
- ② 校長から学校教育目標と具体的な取組について説明を受け、校長及び主任と質疑応答を含めた意見交換を行った。

#### (2) 慶北大学校附属中学校

- ① ICT機器が活用された英語科の授業を参観した。
- ② 校長から学校教育目標と具体的な取組について説明を受け、校長及び主任と質疑応答を含めた意見交換を行った。

#### (3) 大邱市教育委員会

- ① 学校教育部長及び課長から大邱市の特色ある教育施策について説明を受けた。
  - ・「大邱幸福力量教育」
    - 「幸せ教育」の推進。幸福の教科書という副読本を使用。
    - ・知識注入の講義型授業から脱却、問題解決型授業に取り組む。

#### (4) 大邱教育大学

- ① 現職大学院生との意見交換を行った。
  - ・公立学校でのICT機器等の教育環境について
  - ・外国語教育について
  - ・教員の勤務、校務について

### 5 観察後の参加教員研修

- ① 観察参加教員による校内授業研究会の開催(1/20～2/24)
  - 小学校外国語活動、中学校外国語、小学校ICT活用、中学校ICT活用
- ② 授業研究会の成果をふまえた市教委主催報告会の開催(2/26)
- ③ 観察研修報告書の作成(3月下旬)

## 平成27年度加東市教職員海外視察研修にかかる授業研究会・報告会について

### 1 校内授業研究会実施一覧

	会場	授業者（担当者）	授業日程	共同研究者		
外国語活動	社中学校	教諭 金川智恵	1月20日（水） 2校時 9:50～	社中学校	教頭 後藤浩美	
	社小学校	教諭 西田汐里	2月16日（火） 6校時 14:30～	滝野東小学校 米田小学校	教諭 長谷川恭子 教諭 福島獎平	
	米田小学校	教諭 福島獎平	2月24日（水） 5校時 13:50～	滝野東小学校 社小学校	教諭 長谷川恭子 教諭 西田汐里	
ICT活用	東条中学校	教諭 津賀尾雄一	2月2日（火） 5校時 13:55～	滝野中学校	教諭 石井真史	
	鴨川小学校	教諭 宇高健太	2月17日（水） 5校時 13:50～	東条西小学校 社小学校	教諭 桑村泰輝 教諭 末吉哲大	
	社小学校	教諭 末吉哲大	2月23日（火） 2校時 9:40～	東条西小学校 鴨川小学校	教諭 桑村泰輝 教諭 宇高健太	

### 2 報告会協議内容（2月26日開催）【資料1】

- (1) 提案授業について 各グループによる報告
- (2) 事後協議
  - ・英語教育について
  - ・ICT機器の活用について
  - ・その他

### 3 観察報告書の作成（3月下旬）

- ・内容
  - (1) はじめに
  - (2) 観察の概要
  - (3) ICT教育について
    - ・観察内容
    - ・参考となる事項
  - (4) 外国語教育について
    - ・観察内容
    - ・参考となる事項
  - (5) 大邱市の教育行政について
    - ・特色ある教育施策
    - ・参考となる事項
  - (6) 校内授業研究会の実施
    - ・協同研究内容
    - ・事後研究会内容
  - (7) おわりに

**加東市小中一貫教育研究会**

**最 終 報 告 書**

平成28年2月

## 目 次

1 はじめに	1
2 研究経過	2
(1) 中間報告（提言）について	2
(2) 最終報告にむけて	2
3 加東市小中一貫教育推進協議会での協議内容	3
(1) 社地域小中一貫教育推進協議会	3
(2) 滝野地域小中一貫教育推進協議会	4
(3) 東条地域小中一貫教育推進協議会	4
4 今後の推進方策（提言）	6
(1) 「小中一貫校開校準備委員会」の設置	7
(2) 教育委員会のイニシアティブによる推進	8
(3) 加東市小中学校校長会による支援	8
5 おわりに	11

### 【参考資料】

(1) 加東市小中一貫教育の基本方針	12
(2) 加東市小中一貫教育研究会委員等名簿	16
(3) 加東市小中一貫教育研究会開催状況	17
(4) 加東市小中一貫教育研究会設置要綱	19

## 1 はじめに

「加東市小中一貫教育研究会（以下、『研究会』という。）」は、平成27年6月に加東市教育委員会（以下、「教育委員会」という。）の諮問を受け、加東市の小中一貫教育の推進にあたっての課題整理と今後の取組方針について研究・検討を重ねてきました。

平成27年8月には、加東市における小中一貫教育の基本的な考え方とその方向性や留意事項について中間報告を行いました。教育委員会では、中間報告の提言を受け、市内3地域に保護者や地域住民の代表者で構成する「小中一貫教育推進協議会（以下、『推進協議会』という。）」を設置し、小中一貫校の整備方針や開校に向けた準備計画について意見聴取を行いました。

このたび、推進協議会の協議を踏まえ、加東市における小中一貫校の整備方針が教育委員会で決定されました。これを受け、研究会では平成33年の小中一貫先行校の開校準備に向けた方針や取組事項、取組の際の留意点について、最終報告書としてまとめました。

加東市は小中一貫という新たな教育によって様々な教育課題に対応し、「ふるさとを愛し、自らの夢に挑む自立した子どもの育成」を目指すこととなりました。その実現に向けては、教育委員会のイニシアティブのもと、教職員が一丸となって全力で取り組むのはもちろんのこと、保護者や地域住民等、すべての市民が小中一貫校の応援団として、最大限の支援・協力を行っていただくことが大切です。

教育委員会においては、本最終報告書の提言を十分に踏まえ、市民の支援や協力を得て、加東市ならではの小中一貫教育を推進し、保護者や地域住民の願いに応える教育活動を展開されることを期待しています。

平成28年2月

加東市小中一貫教育研究会

委員長 浅野良一

## 2 研究経過

### (1) 中間報告（提言）について

平成27年6月10日の第1回研究会にはじまり、7月2日に実施した先進地の小中一貫校への視察結果を踏まえ、第2回研究会で取組の方向性を確認した。7月31日に開催した第3回研究会では小中一貫教育に取り組む際の留意事項について協議し、8月21日の第4回研究会において、それまでの会議での議論をもとに論点を整理し、加東市における小中一貫教育の基本的な考え方とその方向性や留意事項について、提言として中間的に取りまとめ、教育委員会に報告した。

### (2) 最終報告にむけて

中間報告後、10月1日に第5回研究会、12月16日に第6回研究会、1月27日に第7回研究会を開催し、小中一貫教育の円滑な推進にあたり、中間報告の提言（取組の際の留意事項）にかかる具体的方策等について研究・検討を行ってきた。そして、小中一貫教育推進協議会での議論を踏まえ、第8回研究会において最終報告として取りまとめ、教育委員会に提言する。

### 3 加東市小中一貫教育推進協議会での協議内容

	協議事項	協議内容
第1回	・今後の活動内容について	・推進協議会設立の要旨、加東市の 小中一貫教育について説明後、先 進校視察の実施を決定
第2回	・先進校（3地域合同）視察	・概要説明 ・校内視察
第3回	・先進校視察結果について ・課題の整理と対応方法について ・今後の協議の予定について	・視察により、課題を整理 ・小中一貫校開校前からの準備等の 対応方法についての協議
第4回	・地域の小中一貫教育について	・施設形態、建設候補地及び整備時 期についての意見交換

#### (1) 社地域小中一貫教育推進協議会

##### ※先進校視察結果について

- ・工夫もされており、施設が素晴らしい。
- ・小中一貫教育をするために建てたので使い勝手がよく、子どもにとってよいと感じた。
- ・併設型と比べると、やはり校舎一体型がよい。
- ・ハードは建てたら変えられないで重要。
- ・子ども達が、いきいきしていた。
- ・小学生と中学生がうまく学習しあって、縦のつながりができていた。
- ・9年間を見据えて教育しており、一貫したポリシーを感じた。
- ・本市は通学の問題があるので、今後、取り組んでいく必要がある。
- ・地域の規模が大きい、小さいというのは関係なく、その学校をどうしていきたいのかというところを考えていれば問題ないと感じた。
- ・校長のリーダーシップと地域との深いつながりがあった。
- ・子どもにとって環境は大事で、よい環境を整えてやりたいと思った。
- ・教育目標をたて、H33に開校できる体制をつくることが必要。
- ・小中一貫教育は、やったほうがよいと確認できた。

##### ※課題の整理と対応方法について

- ・部会の構成員に若い人を入れてほしい。
- ・情報を提供し、共通理解を進めていくことが大事である。

##### ※今後の協議の予定について

- ・小中一貫教育が子どもにとって良いのであれば、開校は早い方がよい。3地域同時に開校できなくても、できるだけ地域の差異はないようにしたほうがよい。

### ※地域の小中一貫校について

- ・施設形態は一体型がよい。
- ・建設候補地は、社中学校周辺が適切である。
- ・整備時期はできるだけ早いほうがよい。

## (2) 滝野地域小中一貫教育推進協議会

### ※先進校視察結果について

- ・学校開校と運営に向けた地域住民の組織づくりが大事である。
- ・地域の協力が必要と感じた。
- ・よく考えられて造られており、施設・設備がとてもよい。
- ・施設は一体型とするべきである。
- ・しっかり準備してやれば小中一貫校は成功すると感じた。
- ・バス通学をしているところの様子も知りたいと思った。
- ・荒れている様子はなく、よい環境であるという印象がある。
- ・運動場などが少し狭いと感じたが、滝野地域であればよい環境を整えられるのではないかと思った。
- ・校長のリーダーシップだけでなく学校運営できるシステムをつくることが必要。
- ・実際にやってみることで小中一貫校がよいものであると実感した。

### ※課題の整理と対応方法について

- ・加東市は一つと考えて、小中一貫校を建設する期間を圧縮してほしい。
- ・施設のアドバンテージということなどのイメージの共有化が大事である。

### ※今後の協議の予定について

- ・滝野地域も計画を具体化するために内容をつめていったほうがよい。
- ・通学の不安もあると思うので、場所を滝野中学校周辺としてシミュレーションしたものをしてほしい。

### ※地域の小中一貫校について

- ・施設形態は一体型がよい。
- ・建設候補地は、滝野中学校周辺が妥当である。ただし、地域住民に周知すること。
- ・3地域の状況を踏まえて、整備時期はできるだけ早いほうがよい。

## (3) 東条地域小中一貫教育推進協議会

### ※先進校視察結果について

- ・日常から小学生と中学生が接することができるのがすばらしいと感じた。
- ・教師の意見を取り入れた校舎で、地域に開放する場所もあり、協力体制ができていた。
- ・地域の方のやる気が感じられた。
- ・目的をはっきりさせた校舎設計で、施設・設備がとてもよく、施設は一体型とす

るべきである。

- ・小中一貫教育は、デメリットがないと言われたのが印象的だった。

#### ※課題の整理と対応方法について

- ・学校の開校には幅広い年代の方が関わってほしい。
- ・説明会を最低でも年1回はする必要があるのではないか。
- ・今やることは推進ではなく準備である。部会に広報部があればよいのではないか。
- ・第1回の推進協議会を受けて、東西の小学校のPTA役員が集まった際に、「推進協議会等に学校評議員の参加が必要ではないか」、「教職員の賛否がわからない」、「用地問題（河川災害）、カリキュラムの問題がある」という意見があったことも知っておいていただきたい。

#### ※その他

- ・西小学校は新入生が5人程度になるようで、親としてはとても不安である。

#### ※地域の小中一貫校について

- ・施設形態は一体型がよい。
- ・建設候補地は、東条文化会館周辺が多数。教育効果及び安全面を考慮すること。
- ・整備時期はできるだけ早いほうがよい。

## 4 今後の推進方策（提言）

本研究会では昨年8月の中間報告において、本市の児童生徒にとって、より有効な教育環境の提供を目的とする本市の小中一貫教育の推進にあたっては、下記の事項への適切な取組が不可欠であることを指摘するとともに、各事項の具体的な取組内容についても提言を行った。

### 提言の概要（中間報告書から抜粋）

#### ア 児童生徒の教育を直接的に担う教職員の意欲と資質能力の向上

- ・計画的、継続的な教職員研修の実施
- ・小中一貫教育カリキュラムの早期作成と試行期間の確保
- ・個々の教職員の特性を生かした小中一貫校への適切な人事配置

#### イ 保護者や地域住民との連携の一層の強化

- ・地域の人材や資産を活用したふるさと学習「かとう学(仮称)」の実施
- ・保護者や地域住民の参画を得た学校行事の積極的な実施
- ・保護者や地域住民が学校運営に積極的にかかわる場として、「学校運営懇話会（仮称）」等の設置

#### ウ 小中一貫校の開校により生じる児童生徒の負担の軽減

- ・通学距離を考慮した小中一貫校の建設場所と円滑な通学方法の検討
- ・発達段階に配慮した施設規格や教室配置にあわせ、教室移動の負担軽減と異学年交流が容易となる校舎の設計
- ・小中一貫校の開校までに児童生徒の交流活動の計画的な実施

#### エ 教職員の過度な負担を軽減し、児童生徒と向き合う時間の保障

- ・小中一貫校開校にあたっての教育委員会のイニシアティブの発揮
- ・小中一貫校開校に伴う定数外教職員の確保と配置
- ・教職員の円滑な職務遂行のための職場の施設環境の整備

#### オ 小中一貫校の取組成果の評価と検証

- ・児童生徒による学校生活の満足度調査の実施
- ・保護者や地域住民による学校関係者評価の充実と外部委員による第三者評価等の実施
- ・「学校運営懇話会（仮称）」等における評価結果への対応策の協議

このたび、本研究会の中間報告の提言に基づき設置された「小中一貫教育推進協議会」

での様々な意見を踏まえ、教育委員会から小中一貫校開校に向けた具体的な整備方針が示された。

### 整備方針

- ・各地域の小中一貫校の設置場所は、社会教育施設が利用できる環境を考慮し、社地域は加東市立社中学校周辺、滝野地域は加東市立滝野中学校周辺、東条地域は加東市東条文化会館周辺を適切とする。
- ・各地域の小中一貫校の開校時期は、東条地域は平成33年度、社地域は平成36年度、滝野地域は平成39年度とする。なお、開校のおおむね5年前に各地域の小中一貫教育推進協議会構成員を母体とした「小中一貫校開校準備委員会（仮称）」等の組織を立ち上げ、地域の協力を得て、開校に向けた準備を行うものとし、東条地域については平成28年度に当該組織を立ち上げるものとする。
- ・施設の形態は、各地域とも教育効果及び安全面を考慮した一体型校舎で開校をめざすものとする。

そこで、本研究会としては、小中一貫校開校までの準備期間において、設置すべき組織や検討事項、検討の際の留意事項、さらに、教育委員会の責務や小中学校校長会等が果たすべき役割について提言を行うこととなった。

#### (1) 「小中一貫校開校準備委員会」の設置

小中一貫校の教育活動が大きな成果を上げるためには、学校と地域との連携・協力関係を深め、「地域に根ざした学校づくり」を行うことが不可欠である。

そのため、開校準備を推進する機関として、各地域の小中一貫校開校の概ね5年前に、本年度設置された「小中一貫教育推進協議会」を母体とし、学識経験者等、開校準備に新たな委員を加えた「小中一貫校開校準備委員会」（以下、「開校準備委員会」という。）を設置する。開校準備委員会の組織としては、準備検討事項ごとに【別記】のような部会を設置し、各部会を統括する専門委員会による構成とする。

そして、通学路や通学方法、校名、校歌、標準服等の保護者や地域住民の思いや願いを踏まえて決定されるべき事柄については、当該部会での検討にあたり、例えば、意見やアイディア等を公募することで、保護者や地域住民等の多くの意見が反映できるしくみづくりを行う。

なお、小中一貫校の開校後は、準備委員会を解体するのではなく、「学校運営懇話会（仮称）」として引き続き存続し、当該校のいわゆる「応援団」としての機能を担ってもらうことが重要である。

#### ＜取組内容＞

- ・保護者や地域住民等の協力を得て、小中一貫校開校の概ね5年前に「開校準備委員

会」を設置

- ・開校準備を推進するにあたり、実際の教育活動を行う教職員の意向を十分に踏まえるとともに、保護者や地域住民の思いや願いを反映するしくみづくり
- ・小中一貫校開校後も地域に根ざした学校として、保護者や地域住民が学校運営に積極的に協力できる組織体制づくり

## (2) 教育委員会のイニシアティブによる推進

小中一貫教育の効果的な実施にあたっては、小・中学校学習指導要領の系統性を踏まえ、9年間の連続性を重視した各教科カリキュラムが不可欠である。また、各校の教育課程との整合性や総時間数等に配慮しつつ、各教科・領域との関連を重視した「ふるさと学習『かとう学（仮称）』」（以下、「ふるさと学習」という。）のカリキュラムの作成も行わなければならない。そこで、教育委員会内の教育研究所組織を活用し、各教科代表者によるカリキュラム作成委員会等を立ち上げる必要がある。

これらカリキュラムの作成にあたっては、教育活動の担い手である教職員が主体となるべきであるが、教職員の時間的・精神的負担が過度になることを避け、本来業務である児童生徒と向き合う時間を保障することが重要となる。

そこで、小中一貫校の教育内容に係る諸準備の計画的かつ円滑な実施に向け、教育委員会内に専門性を有する職員の人員配置等を含めた開校準備のための新たな組織づくりを行うことで、教育委員会がイニシアティブを発揮できる体制を整備するべきである。

さらに、小中一貫校の教職員が一つのチームとして新たな教育活動に全力で取り組めるよう、個々の教職員の特性を十分に踏まえた適切な人事配置と加配教職員等の確保を行うことが重要である。

### ＜取組内容＞

- ・加東市教育研究所等において、小・中学校学習指導要領の系統性を踏まえ9年間の連続性を重視した各教科及び「ふるさと学習」カリキュラムの作成
- ・小中一貫校開校準備に向けた教育委員会の新たな組織体制の整備
- ・小中一貫校開校準備の取組状況について、保護者や地域住民、教職員等に周知を図る広報活動の充実
- ・小中一貫教育推進のための適材適所の人事配置と加配教職員等の確保、新たな教育活動に教職員がチームとして全力で取り組める環境づくり

## (3) 加東市小中学校校長会による支援

小中一貫教育の理念やめざす成果について、教育活動の担い手である教職員一人一人の理解を深め、協働体制を構築する必要がある。そのためには、小中学校校長会教科等研究部会との連携により、小中一貫教育に係る各教科等の研究や教職員研修を計

画的に実施することが有効である。

また、児童生徒や保護者的小中一貫校開校に向けた不安を解消し円滑に移行するため、児童生徒の交流活動の促進や小学校の教科担任制の拡充、小中学校教員による「相互乗り入れ授業」の実施等、小中学校校長会として各校における小中一貫教育が計画的に試行されるよう配慮しなければならない。

そして、小中一貫の教育活動の十分な試行を通して、PDCAサイクルの積み上げによる適切な評価・検証を行っていくことで、児童生徒の実態と小中一貫教育に対する保護者や地域住民の願いや期待を踏まえた効果的な教育計画を確立させる必要がある。

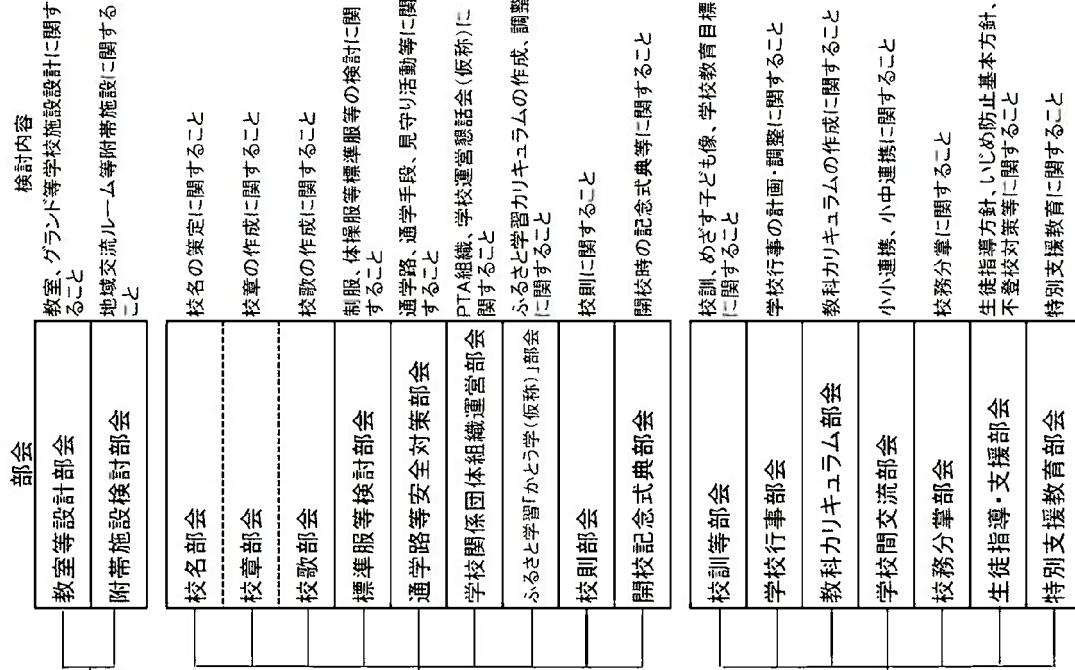
#### ＜取組内容＞

- ・教科等研究部会との連携による、小中一貫教育の研究や研修の計画的な実施
- ・小学校間、小中学校間の児童生徒の意図的な交流活動の促進
- ・小学校における教科担任制の拡充と「相互乗り入れ授業」の実施等、小中一貫教育の計画的な試行

## 【別記】

## 加東市小中一貫校開校準備委員会組織(モデル)

専門委員会	構成員	検討項目
施設整備委員会	*学校評議員 *地域代表 *就学前児童保護者代表 *中小学校関係団体の組織運営にに関すること *学識経験者 *学校運営委員会 各担当教員代表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設設備に関すること</li> <li>・施設建設の進め方にに関すること</li> <li>・校名、校章、校歌に関すること</li> <li>・通学路等安全対策に関すること</li> <li>・学校関係団体の組織運営に関すること</li> <li>・開校時の記念式典等に関すること</li> </ul>
学校教育委員会		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校教育内容に関すること</li> <li>・学校間交流活動に関すること</li> </ul>



## 小中一貫校開校準備委員会

## 5 おわりに

平成27年6月に発足しました「加東市小中一貫教育研究会」の活動は、この2月をもって終了することになりました。会を運営するにあたり、ご尽力いただきました委員・事務局のみなさんに厚く御礼申し上げます。

発足当初は、私もそうであったように、小中一貫教育についての知見不足と相まって不安視される市民の方も多く、会の運営についても一抹の不安がありました。

しかし、加速度的に進むであろう少子化の中で、これからの中東市、ひいては日本の将来を担う子どもたちのために、どのような教育環境を整えていくべきかを考える貴重な機会だと思えるようになりました。委員のみなさんも同様であったと認識しております。

取組の方向性や、いろいろな課題を掘り起こし議論するとともに、先進校の視察を重ねることにより、小中一貫教育への理解がより一層深まりました。

9年間の教育の中で、子どもたちが目を輝かせながら勉学に勤しみ、学力や人間性の向上が図れている様を目の当たりにして、小中一貫教育の有用性を確認することにより、不安が希望に変わったように思います。そのことは、各地域の推進協議会委員の意見にも表れてきていると感じました。

また、この事業の成否のカギは、保護者・子どもを含む地域住民と教職員・行政が一体になった小中一貫教育の学校づくりだと思います。

これから、導入に向けて具体的な準備作業へと移行されますが、当研究会の議論・提言が加東市の教育環境改革に生かされ、将来の子どもたちに歓迎されることを期待してやみません。

平成28年2月

加東市小中一貫教育研究会

副委員長 佐々木 正利

## 【参考資料】

### (1) 加東市小中一貫教育の基本方針

#### ①加東市における小中一貫教育導入の目的

##### 義務教育 9 年間の一貫した指導

各教科をはじめ、運動会や体育祭などの学校行事、道徳等の教育活動すべてにおいて、小学校と中学校の垣根を越えた系統性・連続性のある教育活動を行うことで、ふるさとを愛し、自らの夢に挑む自立した子どもを育成する。

#### ②めざす子ども像

##### ふるさと加東から未来へ

- |         |            |         |
|---------|------------|---------|
| ○自ら学ぶ子  | ○自他を大切にする子 | ○ねばり強い子 |
| ○個性豊かな子 | ○自分を活かす子   | ○たくましい子 |

#### ③取組の視点とめざす成果

##### ・確かな学力・主体的に学ぶ態度の育成

小中学校教員の相互乗り入れ授業や複数指導により、教員それぞれの持ち味を共有し、9年間の系統性を重視した教科カリキュラムによる授業を実施する。

また、小学校での教科担任制のさらなる充実を図るとともに、協同的な学習による主体的な学びや少人数学習や個別指導による基礎基本の習得、グループや学級全体による思考力・表現力等を高める学習等、発達段階に即した効果的な授業形態を展開する。

さらに、小中学校教員が共同で作成する「家庭学習の手引き」等を活用し、家庭学習の習慣化にむけ小学校1年生から9年間を通じた継続的な取組を行う。

- ・9年間の系統性を重視した教科カリキュラムの実施
- ・小学校での教科担任制の充実や協同学習、少人数学習、グループ学習など効果的な授業形態の展開
- ・家庭学習の習慣化にむけた小学校低学年から継続的な取組の実施

### ・自尊感情・思いやりの心の醸成

児童生徒の日常的な交流により、小学生は中学生を成長のモデルとしての「憧れの存在」として身近に感じ、中学生に小学生の「より良き見本でありたい」、「慕われたい」という自然な感情を抱かせる。

4・3・2制の指導区分の導入を理想とし、発達段階に、より即した節目のある教育活動を展開しつつ、児童会活動と生徒会活動を一体化した自治的な活動を通して、集団への所属欲求や承認・自尊の欲求を満たす。

その上で、特に異年齢交流や縦割り班活動の意図的・計画的な実施を通して、他者との関係の中で「人の役に立てた」「人から感謝された」「人から認められた」など、自己に対する肯定的な評価を得る体験を積ませ、自己有用感を獲得させることで自尊感情や思いやりの心を育成する。

さらに、道徳の時間で地域教材の活用を図るとともに、地域の行事や活動と学校の取組を関連付けるなど、家庭や地域での道徳的実践につなげていく。

- ・発達段階に即した系統性のある体験活動の実施
- ・異年齢交流や縦割り班活動の意図的・計画的な実施  
〔入学式、学校給食、ペア学年活動、合同運動会 等〕
- ・家庭や地域と連携した道徳教育の充実

### ・心身の健康増進・個性の伸長

日常的に小中学校教員が児童生徒を見守り支え、情報を共有することで9年間一貫した生徒指導が可能となる。一貫教育の新たな指導体制により、生徒指導上の問題の未然防止と早期対応を目指す。

地域人材等を活用して、発達段階に応じた系統的な学校行事を実施し、児童生徒一人ひとりの個性や能力を活かす場を意図的に設定する。

日常的な異学年交流や縦割り班活動による体育的行事を計画的に実施し、運動の習慣化を図り、体力・運動能力の向上を目指す。

学校給食を活用した交流等の体験活動を積極的に実施し、家庭や地域と連携した食育を推進することで、自らの健康の保持増進を図るとともに、「地産地消」の学校給食をさらに進め、地域の産業や自然に関心を持たせ、地域の食文化への理解を深める。

- ・小中学校教員の情報共有による一貫した生徒指導の充実
- ・発達段階に応じた系統的な学校行事の実施  
〔1/2成人式(4年生)、小学校卒業式(6年生)、進級式(7年生)等〕
- ・地域食材を活用した地域住民や高校等の連携による食育の推進

#### ・グローバル人材の育成

中学校外国語教員、A L T（外国人英語指導助手）との協働的な授業づくりにより、小学校から発達段階に応じた英語教育を充実させ、義務教育修了時には簡単な英会話ができる程度の語学力を身につけさせる。

各教科の学習において I C T 機器を活用したプレゼンテーション等を取り入れた授業の実施を通して、コミュニケーション能力を育成する。

外国人留学生等との交流学習を設定する等、異文化に直接触れる機会の充実を図り、異文化に対する理解を深める。

- ・小学校からの英語教育や外国人留学生との交流等による国際理解教育の推進
- ・市独自の英語レッスンブックを活用した授業や英語ライセンス検定の実施など、「かとう英語ライセンス制度」の効果的な運用
- ・I C T 機器を活用したプレゼンテーション活動の充実

#### ・社会的自立に向けたキャリア形成の支援

職業調べや就業体験等、系統性のある進路学習や体験活動を通して、職業観、勤労観を培うとともに、発達段階に即し将来を見据えた進路指導を充実させる。

地域人材や教育資産を活用し郷土の歴史や文化等に触れる「ふるさと学習（『かとう学（仮称）』）の実施を通して、伝統や文化を尊重し郷土への愛着を深め、よりよい社会づくりに向けて主体的に行動する態度を育成する。

さらに、児童生徒が社会とのつながりの中で自分自身を見つめ、自らの生き方や役割を考えることができるよう、家庭や地域と連携した9年間の系統的なキャリア教育を推進するとともに、防災教育、福祉教育、環境教育との関連を図る。

- ・体験活動を通して職業観、勤労観を培う進路指導の充実
- ・地域人材や地域資産を活用した、地域に学ぶ「ふるさと学習」の実施
- ・家庭や地域との連携した系統的なキャリア教育の推進

# 加東市のめざす小中一貫教育

## 人間力の育成

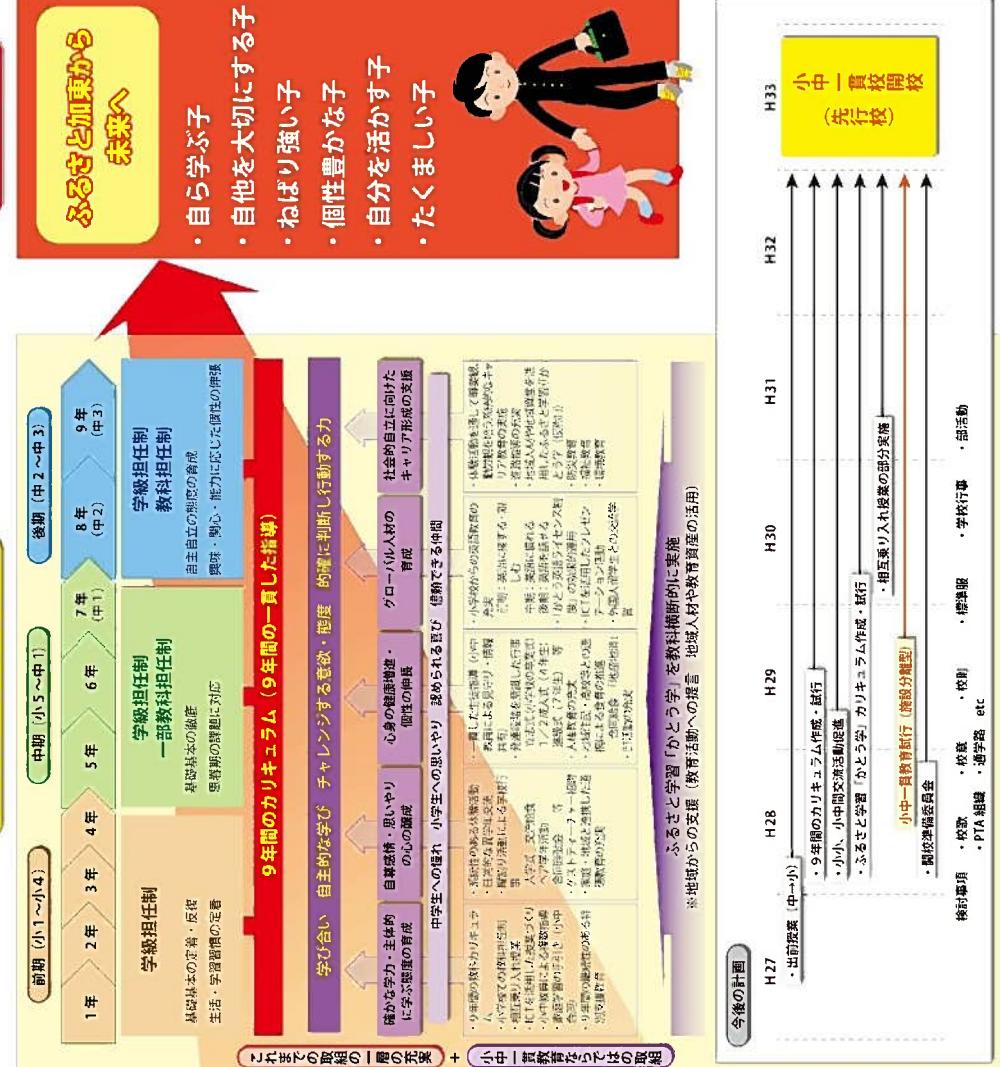
「これまでの取組」



## ふるさとを愛し、自らの夢に挑む自立した子どもの育成

「これまでの取組」

小中一貫校（さらなる取組）



## (2) 加東市小中一貫教育研究会委員等名簿

(敬称略)

## &lt;委員&gt;

学識経験者	浅野 良一	国立大学法人 兵庫教育大学大学院 教授	委員長
	大野 裕己	国立大学法人 兵庫教育大学大学院 准教授	
学校関係者	土肥 貴雄	米田小学校 校長	
	尾崎 高弘	滝野中学校 校長	
	木村 裕司	社小学校 教諭	
	小林 美穂	滝野東小学校 主幹教諭	
	上月 浩忠	東条中学校 教諭	
保護者代表	岸本 吉博	連合PTA副会長	
	黒崎 泰則	連合PTA会長	
	眞海 秀成	連合PTA副会長	
地域代表	佐々木 正利	社地区代表区長（ひろのが丘区長）	副委員長
	小林 喜代治	滝野南地区代表区長（河高区長）	
	石田 和伸	東条西地区代表区長（新定区長）	

## &lt;オブザーバー&gt;

教育委員会	大島 巧男	教育委員長
	藤本 洋二	教育委員長職務代行者
	神崎 芳美	教育委員
	浅川 るり	教育委員
	藤本 謙造	教育長

## (3) 加東市小中一貫教育研究会開催状況

	日時・場所	協議内容等	資料
第1回	H27.6.10(水) 15:30～ 加東市役所 201会議室	(1) 小中一貫教育研究会報告骨子（案）について (2) 加東市の小中一貫教育について～これまでの取り組み～ (3) 保護者アンケートの結果について (4) 現状分析について～アンケート結果より～ (5) 今後の研究内容について (6) その他	①研究会委員名簿 ②加東市小中一貫教育研究会設置要綱 ③小中一貫教育に関するこれまでの経緯 ④小中一貫教育の推進について ⑤これからの中東市の学校教育のあり方（小中一貫教育）に関するアンケート結果 ⑥小中一貫教育研究会 研究報告書骨子（案）
第2回	H27.7.2(木) ①8:00～ 先進地視察（堺市） ②15:00～ 加東市役所 201会議室	(1) 観察結果について (2) 中間報告作成について (3) その他	①小中一貫教育研究会 研究報告書骨子 ②高松第一学園小中一貫教育概要 ③平成27年度加東市連合PTA研修会アンケート結果
第3回	H27.7.31(金) 14:00～ ラポートやしろ 研修室	(1) 中間報告書の内容について（基本的な考え方、報告、提言） (2) その他	①小中一貫教育に関する課題 ②加東市小中一貫教育研究会 中間報告書（案） ③加東市のめざす小中一貫教育 ④小中一貫教育研究会進行表
第4回	H27.8.21(金) 17:30～ 社福祉センター レクレーション室	(1) 中間報告書（案）について (2) その他	①加東市小中一貫教育研究会 中間報告書（案） ②小中一貫教育に係るアンケート結果（教職員） ③加東市のめざす小中一貫教育

第5回	H27.10.1(木) 15:00～ 加東市役所 201会議室	(1) 小中一貫教育に関する 加東市、加東市教育委員会 及び加東市議会の状況に ついて  (2) 教職員対象説明会の実 施報告について  (3) 加東市小中一貫教育推 進協議会について  (4) 小中一貫教育推進の課 題整理と分類  (5) その他	①小中一貫教育に関する加東 市、加東市教育委員会及び加 東市議会の状況について  ②小中一貫教育推進にかかる 教職員対象説明会報告  ③加東市小中一貫教育推進協 議会設置要綱  ④小中一貫教育推進の課題整 理と分類  ⑤加東市のめざす小中一貫教 育
第6回	H27.12.16(水) 16:30～ 加東市役所 201会議室	(1) 小中一貫教育推進協議 会の状況報告について  (2) 最終報告について	①小中一貫教育推進協議会状 況報告  ②小中一貫教育研究会最終報 告骨子(案)
第7回	H28.1.27(水) 16:30～ 加東市役所 201会議室	(1) 最終報告(素案)につい て	①加東市小中一貫教育研究会 最終報告書(案)
第8回	H28.2.29(月) 15:30～ 加東市社公民館 視聴覚室	(1) 最終報告書(案)につい て	①加東市小中一貫教育研究会 最終報告書(案)

#### (4) 加東市小中一貫教育研究会設置要綱

##### 加東市小中一貫教育研究会設置要綱 (設置)

第1条 加東市の小中一貫教育について、学校、保護者及び地域の意見を取り入れながら、その課題を整理し取り組むべき具体的な方策を研究・検討するため、加東市小中一貫教育研究会（以下「研究会」という。）を設置する。

##### (所掌事務)

第2条 研究会は、加東市における小中一貫教育について、調査及び研究・検討を行う。

##### (組織)

第3条 研究会は、委員15人以内で組織する。

2 委員は、次に掲げる者で構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 小学校及び中学校関係者
- (3) 小学生及び中学生の保護者代表
- (4) 地域代表
- (5) 前各号に掲げる者のほか、教育長が必要と認める者

3 教育委員は、オブザーバーとして研究会に参画する。

##### (任期)

第4条 委員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

##### (委員長及び副委員長)

第5条 研究会に委員長及び副委員長各1人を置き、委員の互選により定める。

2 委員長は会務を総括し、研究会を代表する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき、又は欠けたときは、その職務を代理する。

##### (会議)

第6条 研究会の会議は、委員長が招集し、委員長がその議長となる。

2 研究会は、その所掌事務を遂行するため必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

##### (庶務)

第7条 研究会の庶務は、教育委員会教育総務課小中一貫教育準備室において処理する。

##### (その他)

第8条 この要綱に定めるもののほか、研究会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

##### 附 則

この要綱は、平成27年4月28日から施行する。

「 Learning English through English

～英語をより多く使う授業を目指して 」

報告者 社中学校 後藤 浩美、金川 智恵

1 協同研究にあたって

(1) はじめに

韓国視察を通して、英語に触れる機会や時間をより多く確保することが、英語の力を伸ばす上で、大きな条件であると考える。そこで、「英語をより多く使う授業」を意識して、提案授業を行う。

- ・日常生活における会話場面をとりあげ、より自然な場面設定をすることにより、生徒の意欲喚起と自然な発話を促す。
- ・教師の英語使用を増やすことにより、生徒が英語を聞く機会・時間を増やす。
- ・生徒が英語を使う機会・時間を増やす。

2 事後研究会より

(1) 協議内容

実際に日常生活で英語を使う場面での対話が教材であるため、生徒は意欲的に活動に取り組み、積極的に発話をしていた。1時間のうちで、基本的な表現を習得した後に、現実に即した状況設定での対話をさせたが、暗唱等、基本的な表現習得を徹底させる時間を経れば、さらに充実した活動になつたのではないかと思われる。また、表現のインプットを先にするほうがよいのではないかという意図のもと、教科書にある Step 1 (対話ドリル) と Step 2 (対話の聞きとり) を入れ替えて活動を行った。活動の順序や内容等、表現習得の過程を大切に、丁寧な指導を心がけたい。

Step 2 での聞き取った内容の答え合わせの際に、英間英答で確認ができたのではないかと思われるが、生徒の力を考慮して、あえて日本語での確認を行った。可能な限り英語で、という姿勢は求められるが、日本語を用いることで、理解の確認を速く確実に行えるのは利点であると考える。

英語の表現力とともに、ジェスチャーやアイコンタクトなど、非言語コミュニケーション力を高める取組も大切にしていきたい。

(2) 成果

生徒が英語を話したいと思える状況、英語を話す必然性がある場面設定を含む活動を仕組むことが大切であり、授業の中で、生徒ができるだけ多くの英語を聞き、読み、話すことが英語力向上のために有効である。だから、生徒ができるだけ多くの英語に触れることができるよう、教師自身の英語力を高めるとともに、自分たちの教科指導力を日々スキルアップしていくなければならないということを英語科教員全員で再確認し、共通理解が図れた。

(3) 課題

生徒が知識としての英語力を持っているだけではなく、英語をことばとして活用する力を育てなければならない。発信したい自分自身の意見や考えを持ち、それを積極的に表現しようとする生徒を育てることが大切である。生徒を理解し、日本語を使える教師が英語を教えることが利点となるように、より効果的な英語教育のあり方について研究を深めるとともに、教師自らが力量をつけ、専門性を高め続けていく必要がある。

### 3 授業案

#### (1) 本時の目標

自分の行きたい場所への行き方を尋ねたり、路線図を見ながら説明を聞いたり、電車を利用しての道案内ができる。また、間違いを恐れず、積極的に英語で話すことができる。

#### (2) 視察から取り入れること

日常生活における会話場面をとりあげ、より自然な場面設定をすることにより、生徒の意欲喚起と自然な発話を促す。また、教師の英語使用を増やすことにより、生徒が英語を聞く機会や時間を増やす。

#### (3) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点
1挨拶	・元気に挨拶をさせる。
2ウォームアップ station / museum / stadium / library	・ワードスクランブルで、使用する単語を思い出させる。 ・教科書のダイアログをALTとの対話で導入する。
3導入	
	<p>Could you tell me how to get to City Library? Take the train from track number 2. Change to the Namboku Line at Chuo Station.</p>
4内容理解	・簡単なやりとりをしながら、対話の内容を理解させる。
	<p>Where does Megu want to go? Where will she get off?</p>
5音読練習	・教科書の対話が読めるように練習させる。
6聞き取り(step2)	・大切な部分にポイントをしづらせて聞き取らせる。
7口頭練習(step1)	・電車を利用しての道案内を練習させる。
8コミュニケーション活動	・実際の路線図を使って、道案内をさせる。
	<p>実際の電車の路線図を使って、道案内をしてみよう</p>
	<ul style="list-style-type: none"><li>・間違いを恐れず、相手に自分の知っている情報を相手に伝えるよう励ます。</li><li>・何番線のところや、電車の種類など自由に考えてよいことや、ひと駅を約3分として所要時間を考えるよう伝える。</li><li>・既習の表現を盛り込んだ、対話をさせる。</li></ul>

## 「加東市教職員海外視察研修報告書 外国語活動」

報告者 社小学校 西田 汐里、米田小学校 福島 奨平、滝野東小学校 長谷川 恭子

### 1 はじめに

小学校における外国語活動の本格実施から4年、平成30年には5、6年生で教科化され年間70時間、3、4年生でも外国語活動が年間35時間実施される。中心は英語教育で、ALTが主になって指導計画や授業を行っているが、担任中心の授業へと移行していく傾向がうかがえる。一方韓国では、1997年に小学校3年生から英語が必修化され、現在は、小学校3・4年生は週2回、5・6年生は週3回授業が行われている。先進的な英語教育が行われている韓国的小学校での指導体制、授業の内容、教材、学習環境、児童の様子を中心に視察し、加東市の小学校での外国語活動に取り入れることを目的にした。

### (2) 大邱教育大学校附設初等学校 英語授業参観

4年生の授業を参観した。授業は英語専用教室で行われ、英語専任教師とALTによって行われていた。クラスルームイングリッシュが定着し、活動の説明などほぼ英語のみで行われていた。授業の進行は英語専任教師が行い、発音が不十分なものについては、ALTがすかさず発音の仕方を示しテンポよく授業が進められていた。学習内容に合わせた歌をYOUTUBEでさがしたり、デジタル教科書を利用したりし、ICTが積極的に取り入れられていた。視覚化されることにより、英語に慣れ親しみやすいように感じた。また、歌ったりグループ学習したりする際には、児童は身振り手振りを入れながら堂々と発音し、グループで行うゲームでは英語でコミュニケーションをとっていた。さらに、授業の中には、英語を書く活動も取り入れてあり、読み書きもできるようになるのが目的であることがうかがえた。



### 2 事後研究会より

#### (1) 担任が主となり進行し、児童が意欲的に取り組む活動となっていたか。

①授業者 社小学校 西田汐里

担任が積極的に英語で話し、ジェスチャーや表情で伝えようと意識したことで、児童もどういう指示なのか聞き取ろうとしたり、自然に英語で答えたりしようとしていた。「はらぺこあおむし」の読み聞かせでは、短いセンテンテス、挿絵から話の内容を探ることができますため、絵本の世界に浸り楽しんで取り組めていた。ペア学習では、はじめ戸惑う様子も見られた。ゲームの進め方対話例など要領を示す英文掲示をしておく方が活動しやすかった。

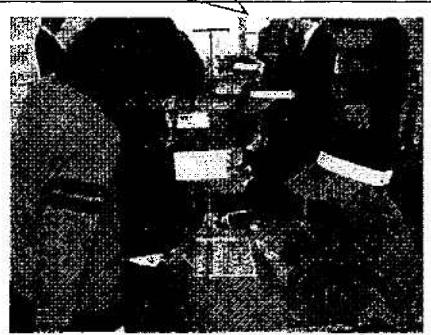


## ②授業者 米田小学校 福島獎平

店員の帽子やメニュー表、アメリカドルの紙幣の模型など、小道具を準備することで、児童が店員や客になりきり楽しんで活動を行えていた。

新しい単語を使って会話やゲームをする場面では、消極的であったり声に出さなかったりする児童も見受けられた。また、自分が伝えたいことだけ話し、コミュニケーションになっていないこともあった。担任が日本語で指示を出すことがあると、英語の世界から抜け出してしまい児童も日本語を多用してしまった。指導案は、担任と ALT の役割を明確にしておく必要があった。

What would you like?



### (2) 成果

今回授業研究会の指導案作成にあたって、ALT に頼りきりにならずに担任が主となり進行していくことを念頭においた。そうすることで、ALT との役割分担することや事前打ち合わせの重要性に気付くことができた。また、今回つけたい英語の力は何であるかを授業の中心に置き、はじめに行う歌やゲームでも授業につながりをもたせられるように考えた。

英語は単語を覚えたり書けるようになったりすることが小学校の外国語活動の目的ではないが、英単語やフレーズを知らずにコミュニケーション活動を行うことはできない。児童は ALT の口元をしっかりと見て発音をまねることを重視すること、可能な限り環境を整えることで学習意欲や雰囲気が違ってくることが分かった。月の歌を英語のものを取り入れる、英語集会を開く、校内に英語の掲示物を増やすなど英語に触れる機会を持つアイデアも相談でき良かった。

### (3) 課題

#### ①ALT との役割分担

担任と ALT で事前に打ち合わせを行い、授業の流れの確認や役割分担しておくことが大切である。その時間確保も今後の課題である。ALT の役割として児童が外語としてよく知っている単語も、正しい発音を示しインтоネーションやアクセントの位置など何度も声に出して発音する中で少しずつ身に付けさせていく必要がある。また、担任と ALT とが息を合わせて活動を行っていくことで教室の雰囲気を作っていくため、いかにして ALT とコミュニケーションを図っていくか課題といえる。

#### ②英語に浸れる環境作り

外国語活動を行うにあたり、児童を英語の世界に浸らせる環境をつくることが重要である。外国語教室の設置など英語の活動に適した教室があれば活動がスムーズに行える。海外の写真や英単語などを掲示し、日常的に英語に触れる環境を整えることで、英語に慣れ親しみより一層身近に感じられるようになると考える。また、外国語活動の時間外でも ALT と英語で接する機会をもてるとよい。例えば、外国語教室で常駐してもらい、自由に児童が英会話を楽しめる場が作れるといい。

また担任は、いつも英語活動の中で使う英語（クラスルームイングリッシュ）を言えるようになり年間通して使っていかなければならない。担任が自然に英語を話すことで学習のムードも高まり児童のよいお手本となることができるため、教師のスキルアップが必要である。

○本時の学習

(1)目標

- ・日本語で書かれた絵本と英語で書かれた絵本を比べながら聞くことができる。
- ・食べたもの、曜日を英語で尋ね、答えることができる。

(2)視察から学んだこと

- ・担任が主体の授業をする。
- ・英語を話しやすい環境を作る。

(3)展開

段階 配時	形	学習活動	手立て(・)と評価の視点(☆)
⑤ 見通す  学び合う(3~5)	全	1 Greeting 食べたものを聞こう "What did you eat?"	<ul style="list-style-type: none"> <li>・曜日、日付、天気の確認をする。</li> </ul>
	全↓ペ	2 How are you? game	<ul style="list-style-type: none"> <li>・How are you?ゲームを通して、"How are you?"の表現を練習する。</li> <li>・2班ごとに"good" "so-so" "sleepy" "tired"と割り振る。</li> <li>・ペアでじゃんけんをして、負けた方が相手のチームの仲間になる。</li> <li>・人数が多いチームが勝ち。</li> </ul>
	全	3 Song of day	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌を通して、曜日の言い方を復習する。</li> <li>・絵カードを使って、視覚的に曜日のイメージを持たせる。</li> </ul>
	全	4 "The Very Hungry Caterpillar" Reading	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話の途中で、質問(What did you eat on ~?)を入れ、絵本に浸らせる。</li> <li>・教師が繰り返して同じ表現を使うことで、食べたものの聞き方に慣れる。</li> </ul>
	全↓ペ	5 Interview game	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで何を食べたか、いつ食べたかを尋ねることで、表現の練習をする。</li> <li>・机の列を使って、ペアを作ることで、だれとでも話せるようにする。</li> <li>・一人一人に違う食べ物と曜日が書いてあるカードを配る。</li> <li>・ペアで食べたものと曜日を尋ねあい、WSに記入する。</li> </ul>
⑤ 戻り返る	個	6 Reflection	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1時間振り返って、出来たことや感想を書かせる。</li> </ul>

参考：授業案

(1) 本時の目標

お店でのメニューの注文についての表現を知り、尋ねたり、答えたりして表現に慣れ親しむ。

(2) 視察から取り入れること

授業づくりや流れなどについてALTとの打ち合わせを密に行い、担任主導で授業を進める。

(3) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点
1 あいさつをする。 2 料理の言い方を復習する。	○料理の英語の表現をALTの後に続けて発音したり、ジェスチャーゲームをしたりしながら復習する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">好きなメニューを注文しよう What would you like?</div>
3 「What would you like?」の表現について知る。	○教師とALTの役割演技を通して、「What do you want?」と「What would you like?」の表現の違いを確認し、お店でメニューを注文するときの言い方を知る。
4 「What would you like?」を使ったゲームをする。 <ul style="list-style-type: none"><li>・班で行う。児童は、料理のカードを机に並べる。児童は、頭の上に両手を置く。</li><li>・児童が「What would you like?」と尋ねる。</li><li>・ALTが「【料理名】 please.」と言い、答えた料理のカードを素早く取る。</li></ul>	○カルタゲームを通して、「What would you like?」の表現を練習する。
5 「料理注文ゲーム」をする。 <ul style="list-style-type: none"><li>・店員役とお客様役を決める。</li><li>・お客様は、10ドルを持ってお店に行き、自分が食べたい料理を注文する。</li><li>・店員は「What would you like?」と尋ね、お客様は「【料理名】 please.」を言う。</li><li>・店員は、注文した料理を渡して、お客様は、お金を払う。</li></ul>	○まず、教師とALTで実際にやってみて、全体でやり方を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"><ul style="list-style-type: none"><li>・店員役とお客様役を決める。</li><li>・お客様は、10ドルを持ってお店に行き、自分が食べたい料理を注文する。</li><li>・店員は「What would you like?」と尋ね、お客様は「【料理名】 please.」を言う。</li><li>・店員は、注文した料理を渡して、お客様は、お金を払う。</li></ul></div>
6 ふり返りを書く。	○3人1組のグループに分かれて、ゲームを行い、お店での注文の仕方の表現を練習させる。 ○グループでの練習の後、全体の場で発表する。

# 「大邱市における ICT 機器等の設備とその活用方法について」

報告者　滝野中学校 石井 真史、東条中学校 津賀尾 雄一

## 1 協同研究にあたって

### (1) はじめに

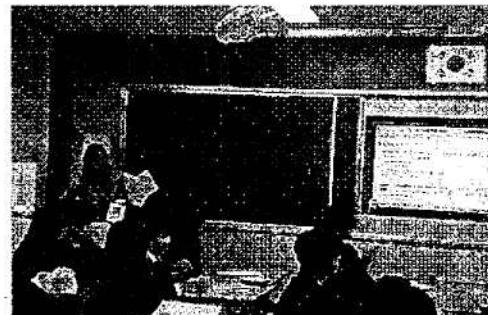
大邱市では、数年にわたって ICT 機器の設備計画を推進し、視察した附属小学校だけでなく国公立・私立の学校に関わらず全ての学校で普及率が増加していきている。また、設備だけでなく質の高い教員育成や機器を活用するための教材づくり等、機器の設備以外の取り組みについても話を聞くことができた。以下に小・中学校での現場視察を通して ICT 機器の設備内容等の取り組みと、その活用方法についてまとめる。

### (2) ICT 機器の設備と電子教材について

小学校では天井から吊るした大型モニターとそれに連動するコンピュータが各教室に備え付けられていた。また、1人の教師につき2台～3台のコンピュータが当てられていた。他にも廊下に英会話の音声が流れる機器や、PC室での設備を見てもかなり充実していた。中学校では黒板に内蔵した形の電子黒板で、黒板をスライドして使用していた。



(大型モニターとコンピュータ)



(黒板に内蔵した形の電子黒板)

### (3) ICT の活用方法とその分析

①授業のはじめに、ワークシート学習の手助けとなる動画を視聴する。

…その後は生徒が教師の手を借りずにワークシートを進めていくため、その補助として効果がある動画であった。

②授業中に授業内容に関係する絵や図を提示する。

…生徒の理解を支援するために提示していると考えられる。教室で見せられないもの（場所や時間の制限があるようなもの）を見せ、イメージを持たせるための図であった。

～ねらい～

・動画を視聴させることで実験方法説明などの時間を固定する。

・教師が演示をしつつ実験の説明を行うとどうしても余計な説明や席による見えにくさが出てくる。動画を制作、視聴することで、それらをできる限り減らす。

## 2 授業案

### 第1学年A組 理科学習指導案

指導者 津賀尾雄一

1 単元名 力による現象

2 本時の学習

(1) 目標

風船CD（手作りホバークラフト）はどうしてなめらかに滑るのかを実験結果の比較から、空気の力によって摩擦力が減少していることに気付き、理由を説明することができる。

(2) 研修から取り入れること

参観した授業では、初めに授業内容に関連する動画を視聴し、その後、各班で自主的にワークシートにある課題を進める形態であった。教師は机間巡視するが、基本は生徒が中心である。また、ワークシートのまとめは行っていなかった。ICT活用としては、初めに実験動画視聴、ワークシートの提示を行う。教材には、危険がなく、簡単に取り扱える装置を使っての実践を考えた。授業の最後には、生徒から出た発言をもとにまとめも行う。

(3) 準備物

風船CD（手作りホバークラフト）、ホワイトボード、ワークシート

(4) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価規準
1 本時のめあてを確認し実験動画を視聴する。	・動画で実験のやり方や手順を確認させる。	
	<b>学習課題「風船CDがなめらかに滑るには何が必要か探ろう」</b>	
2 ワークシートに沿って実験を進める。 ○風船を膨らませずに机上を滑らせる。 ・どれくらい滑るのか。 ・なぜ止まってしまうのか。	・なめらかに滑ったか、すぐに止まったかという選択肢を用意する。 ・止まるときに何という力がはたらくか、日常の出来事に置き換えさせる。	・実験に関わろうとしている。(観察)
○風船を膨らませて机上を滑らせる。 ・風船を膨らませない場合と比較して、滑り具合はどうなのか。	・風船がしほんだ状態と比較し、進む距離がどのようにになったと言えるか書かせる。	・班で協力し、班の全員がワークシートに記入できる。 (ワークシート)
3 班で、風船を膨らませた場合、なぜよく滑るのか意見をまとめ、発表する。		

○話し合い、ホワイトボードに図示する。	・図で表す場合に、机の面と風船 CD の面が分かりやすく書くよう助言する。	・図と説明を考え、まとめることができる。(観察)
○図示したものを用いて発表(説明)する。	・各班から出てきたキーワードを板書に残しておく。	・図をもとに摩擦力の減少を説明できる。(発表)
4まとめを書く。	・各班から出てきたキーワードをもとにまとめ、図示する際に大切なポイントも示す。	
5自己評価カードを記入する。		

### ワークシート

## 力のはたらき～風船 CD～

1年 組 氏名 ( )

課題：風船 CD がなめらかに動くためには何が必要か探ろう

### 1 映像を見て、実験して、考えてみよう！

①風船がしほんだ状態で風船 CD を押しても、風船 CD はほとんど進みませんでした。本当にそうなるか、実際にやってみてください。

風船 CD は なめらかに進んだ ・ すぐに止まった

②では、なぜそのようになったのか、考えて、書いてください。

力 が、風船 CD の進行方向と にはたらくから。

### 2 実験して、考えてみよう！

風船を膨らませた状態で風船 CD を押すとどのように動くのか、実際にやってみてください。

・ 1と比べて、進む距離はどうなりましたか。

1と比べて、進む距離が なった。

### 3 まとめ

図示

---



---



---



### 3 事後研究会より

#### (1) 授業者より

##### ○ICT活用について

はじめに実験動画を視聴させ、実験方法や実験目的の理解を図る。その後は、できる限り見守る形で実験をさせる。

～ねらい～

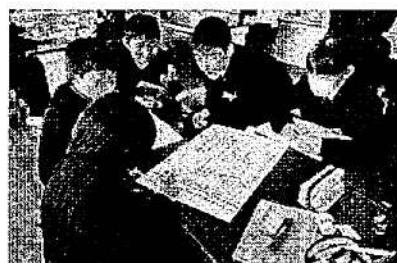
- ・動画を視聴させることで実験方法説明などの時間を固定する。
- ・教師が演示をしつつ実験の説明を行うとどうしても余計な説明や席による見えにくさが出てくる。  
動画を制作、視聴することで、それらをできる限り減らす。

##### ○問題解決能力、プレゼンテーション力

各班で実験を行い、考察する。教師はできる限り実験に関する助言をしない。発表に用いるホワイトボードには、図と少しの言葉を書かせ、発表に用いる。

～ねらい～

- ・各班で動画を元に実験することで、どのようにやっていたか、どうすればよいのかなど、話し合う機会が生まれる。
- ・考察し、それを図示させることで、班内での共通理解を図らせる。言葉では、わかりにくい生徒も図になると理解できる。また、図にしてみて、不足する部分やより分かりやすい工夫をすることで、部分的に理解できていなかったことも見えてくる。
- ・発表は、自分の言葉で話すことになる。そのため説明を考え、試行錯誤して発表に出てくる。班の中で協力して考えたり、原稿を作ったり…。
- ・発表中に図を指しながら発表を行うようになる。



(グループで話し合う様子)

#### (2) 協議内容

##### ○ICT活用について

- ・「教師が実験の手本を前で行うこと」と「電子黒板で実験の動画を見せること」では、教育効果として大した差はない。ICTの効力は、普段目の前では見ることのできない現象の提示や実験時間短縮のため、危険回避のためなどに活用してこそ効果的であると思われる。その様な視点でICTの活用を考えた場合、授業の終わりにホバークラフトやリニアモーターカーなどの映像を見せることが効果的であるように思う。
- ・ホワイトボードに図示させたものを、書画カメラでモニターに映すと見やすい。
- ・生徒の思考の助けになったかと考えると、もっと効果的な活用方法があったのではないかと思う。
- ・実験動画は分かりやすかった。何をするか明確になる。

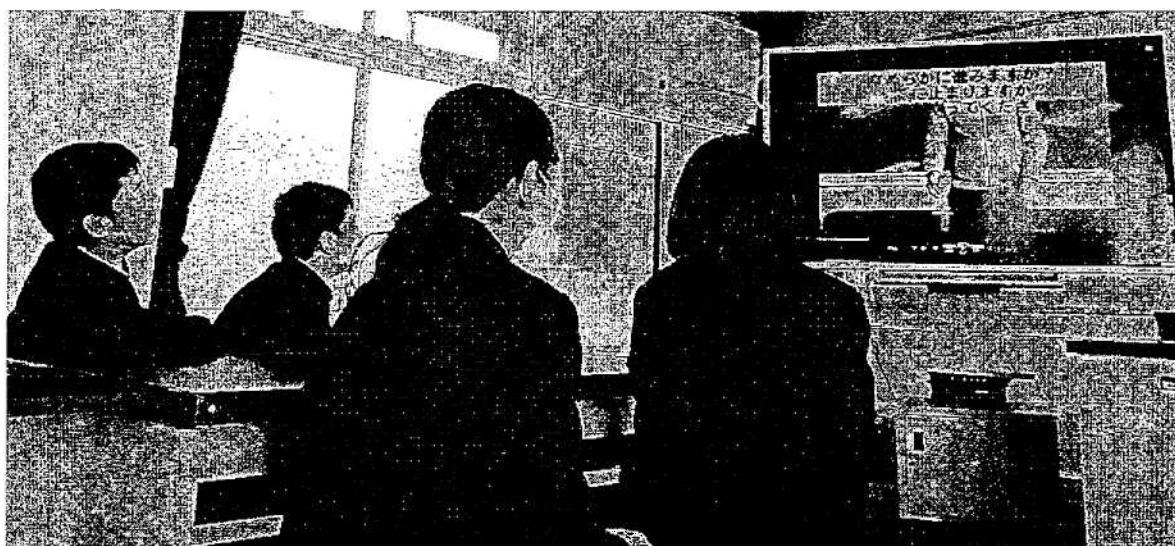
##### ○プレゼンテーション力の育成について

- ・実験した考察をプレゼンテーションすることは、とても素晴らしい。積み重ねの必要もあるので、続けていくとよい。図示する能力や要点をまとめて発表する能力が育成され、説明力が身に付く授業であった。
- ・同じ結果や発表内容であるにも関わらず、例えを使う班や言葉を言い換える班、矢印を工夫する班など様々あり、日頃の授業の充実がうかがえた。

- 途中の班から図や説明の工夫について教師が指摘をしていた。それぞれの班で何らかの工夫を捉え、示すようにした方がよい。
- 発表の仕方がよかったです。発表を聞く側の姿勢（発表者の方を向いている）もよかったです。考察もよくできている。

○その他

- 自分の班と他の班のプレゼンテーションを比較し、どうであったか考え、まとめてもよかったですのではないか。次回以降のプレゼンテーションに役立つはずである。
- 楽しい授業の雰囲気で、生徒が意欲的に学習できていた。教師と生徒のコミュニケーションがよく作られていることがわかり、大変よかったです。



(あらかじめ準備した動画を電子黒板で流す)



(グループ発表の様子)

## 加東市教職員海外視察研修報告書（ＩＣＴ活用について）

報告者　社小学校　末吉　哲大　鴨川小学校　宇高　健太　東条西小学校　桑村　泰輝

### 1 はじめに

昨今の教育現場は、タブレットやデジタル教科書などの普及が急速に進み、教育のデジタル化が起っている。日本では経済の持続的な成長を維持するために、2020年までにデジタル機器の1人1台体制を実現させ、ICT教育の本格化を目指している。また、他の先進国でも、すでにICT教育に本腰を入れ、情報を活用する力、問題を解決する力、自律的に行動する力などが身につくと期待されている。

そこで、今回、ICT先進国とされている韓国に行き、教育現場でICTがどのように活用されているのかを研修した。以下にその内容をまとめる。

### 2 韓国のICT活用の実際

#### （1）整ったICT環境

日本と大きく違うのは、教室環境である。大邱教育大学附設小学校では、大型モニターがどの教室にも常設されており（写真1）、教師の机にもデスクトップパソコンが置かれている（写真2）。モニターとパソコンは接続されており、すぐに映像が出せるようになっていた。プリンタも置いてあり、印刷も教室で可能であった（写真3）。さらに、教室のすぐ隣に教員室があり、そこにあるパソコンと教室のパソコンもつながっていた。また、パソコン室には児童1人1台のデスクトップパソコンがあった（写真4）。中学校では、黒板に内蔵された電子黒板があった（写真5）。内蔵されているので、黒板をスライドして普通の黒板として使用することも可能であった。

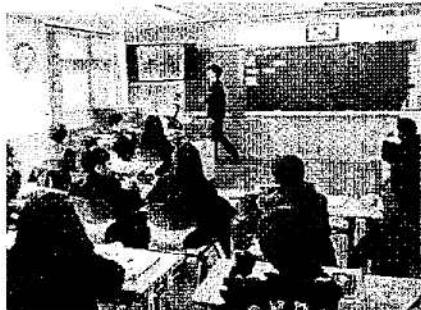


写真1



写真2

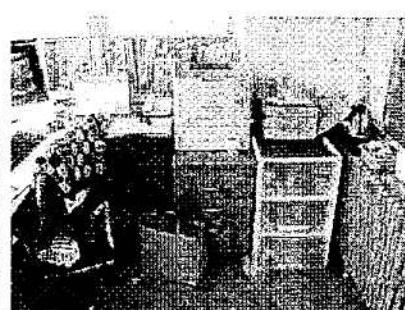


写真3



写真4



写真5

## (2) ICT活用の仕方

小学校・中学校での使用方法は以下の通りである。

- ①朝の歌で歌詞と歌を流す(写真6)。
- ②図工科で制作活動の方法を動画で見せる(写真7)。
- ③外国語活動でyoutubeの動画を見せる。(授業の導入部分)
- ④社会科で昔のくらしの教材を見せる(写真8)。
- ⑤中学校英語でyoutubeの動画(教育番組)を見せる。

動画にしてもテキストにしても、学習内容に関する動画や資料を提示するための使い方が主である。日本との違いは、その提示を多くの授業で活用している点が違う。つまり、子どもたちにとって、動画を見たりすることが普通の状態であるということである。また、教師としても使うのが当たり前という意識があるのでないかと感じた。

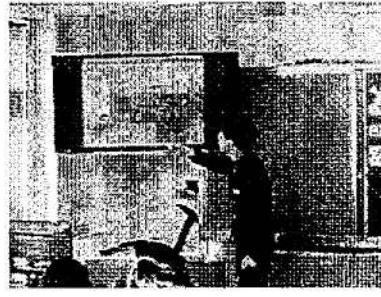
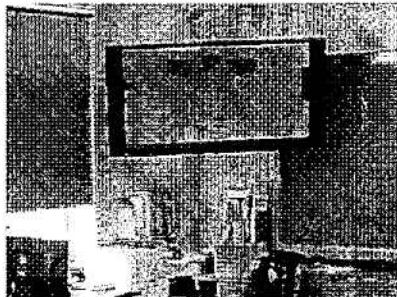
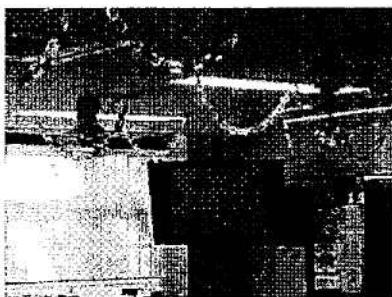


写真6

写真7

写真8

## 3 おわりに

今回、韓国の視察をして感じたことは2つある。1つ目は、設備を整える大切さである。大邱教育大学で地方の現場で勤められている教師の方と話す機会があり、そういった地方はどうなっているかと聞いてみた。地方の小学校でも、大型モニターは常設されていると教えてもらった。使いやすい環境を整えることで、教師が当たり前に使用するようになる。それが当たり前になれば、子どもにとっても使うのが当たり前になる。今後の子どもたちが生きていく社会を考えると、パソコンは身近にあり使うのも当たり前になる世の中だからこそ、そういった環境を整える大切さを感じた。

2つ目は、教育現場でICT活用をするバリエーションを持つ必要があるのではないかということである。今回、韓国では、教師側の提示としての使用方法が主であった。利点は、動画を見せたり、モニターに資料を映したりして子どもの視線を集め、何度も繰り返して見ることができるなどである。もっと発展させて教師からだけでなく、子どものノートを提示して、どんな考え方を発表させるなどの方法も考えられた。そういった、提示の仕方にも変化を持たせることで、ICT教育を目指している情報を活用する力、問題を解決する力、自律的に行行動する力などが身につくのではないかと感じた。

今回の研修で、今までと違った視点からICT活用に関する考えを持つことができた。

# ICT授業実践 国語科学習指導案

指導者 末吉 哲大

## 1 単元 海の命（光村図書 6 下）

### 2 単元目標

- 登場人物のつながりや心情を読み取りながら、主人公の生き方について自分なりの考えを持とうとする。（関心・意欲・態度）
- 登場人物の相互関係や心情・場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる。（C読むこと）

### 3 指導にあたって

本学習に参加する児童は、特別支援学級（自閉症・情緒）に在籍する6年生のA児1名である。

A児は、検定教科書を使用し、当該学年同様に国語の学習を進めてきた。A児は、勤勉で記憶力も高いため、漢字や計算方法、実験の結果、歴史上の人物などよく覚えている。一方で、自閉症という特性もあり、想像力が固定的で、状況理解、社会性、などに困難を抱えている。また、日常に使用している言葉であっても意味理解が曖昧であったりするなど、語彙理解の困難も見られる。このことから国語の、特に物語の読解には、多くの場面で個別的な配慮を必要としている。あまりに理解できない課題が続くと、自信を喪失し、学習に対する意欲も大きく減退してしまうため、A児自身の理解度に応じた、柔軟で臨機応変的な支援を心がけている。

本単元「海の命」は、主人公「太一」が、豊かな自然の中で「おとう」や「与吉じいさ」など周囲の人物に魅せられながら、一人前の漁師として成長していく過程を追った物語である。A児は、文章中に出てくる漁師の仕事や魚の様子を、社会や理科の既習事項を頼りに関連付け、非日常に想像を膨らませながら学習を進めていくだろう。

指導に当たっては、題名でもある「海の命」とは、一体何かということを単元を通して問うとして、各場面で描かれる登場人物にとっての「海の命」を読み取りながら学習を進めていきたい。その際には、デジタル教科書のコンテンツやワークシートなどを用いて、各場面の概要を整理したり、場面の状況に応じた動画を視聴させ、想像力を補ったりする学習支援を行う。

本時は、単元の導入にあたる。音読は、すでに家庭学習で行っているため、始めに物語のあらすじについて、A児の理解を確認し、そこに沿った学習計画と一緒に立てたい。また、読解に向けて語句調べを行うが、多くの語句をなるべく短時間で調べるために効率化と、A児の学習に対する意欲を高いままで維持する負担軽減のため、タブレットPCとインターネットコンテンツを活用して学習を進める。

## 4 本時の学習 (第1時)

### (1) 目標

- 単元を通した「問い合わせ」を決める。
- 場面ごとの状況（登場人物、場所、時[太一の年齢]）を整理してワークシートにまとめる。

### (2) 主なICT活用場面と期待される児童の姿

活用場面	分からぬ語句の意味調べ
活用のねらい	辞書を引く時間的、精神的負担をタブレットPCを用いたインターネット検索により軽減する。
期待される姿	意味理解の曖昧な語句について、積極的に調べ、記述する。

(3) 準備物：電子黒板・タブレットPC・ワークシート

### (4) 展開

段階 配時	学習活動	手立て(・)と評価の視点(☆) ICT活用(◆)
(5) 見通す	1 学習課題を確認する。	・ 課題と合わせて、学習の流れを提示することで、本時の見通しをもたせる。
	2 新出漢字を書く 3 題名読みをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">「海の命」ってなに？</div>	◆ アプリ「筆順辞典」を使用して、自主的に学習が進められるようにする。
取り組む (30)	4 場面わけ・場面の整理をする。 5 1場面の語句調べをする。	・ どうしてこの題名になったのか考えさせることで、物語全体への「問い合わせ」を意識させる。 ☆ 問いを持つことができたか。 ・ 場面を挿絵や状況と関連付け、ワークシートに記述させることで、状況整理を行う。 ☆ ワークシートに必要事項がまとめられたか。 ◆ タブレットPCを用いて、語句調べをネット検索で行う ☆ 場面の語句調べが、ノートにまとめられたか。
(10) 振り返る	6 学習の振り返りをする。 ・ 問いについて ・ 学習について	・ 振り返りに不安が見られる場合は、板書やワークシートを確認し、教師と一緒に振り返る。 ☆ 学習内容を正確に振り返ることができたか。

## 授業の成果と課題まとめ

### 成果

- デジタル教科書を使用したので、注目する語句や場面の確認など、文章中の位置関係を児童と共有でき、スムーズに学習が進められた。
- ワークシートもデジタル教科書に付属のものを使用したので、コンテンツを見ながら、連動してワークシートに記述することができた。
- デジタル教科書のタグ機能を使い、本文とワークシートを必要に応じて切り替えて授業を進めるなど、デジタル教科書の多機能性が活かされていた。
- 漢字指導をスマホのアプリで行った。個別で行うにはタブレットよりも省スペースで済み、扱いやすい様子が見られた。
- 3つのICT機器（電子黒板・タブレットPC・スマホ）が無理なく使われていた。児童もそれぞれの機器の扱いに慣れており、普段から機器が活用されていることが分かった。

### 課題・提案

- ☆児童のワークシートとデジタル教科書のコンテンツでは、若干ずれが見られた。授業展開に合わせたカスタマイズができないのであれば、板書で示す等の工夫が必要。
- ☆辞書を引く機会も確保しながら、今回のようなネットを使った意味調べも将来的な技能としては必要だと感じた。
- ☆ネットを使った意味調べは、確かに簡便で負担も少ないが、広告がいたるところに見られるため、使用に慣れていない児童や、気になる児童には不向きであるし、学習にそぐわない内容の広告も出てくる可能性がある。やはり、国語辞典のソフトを購入し、各ICT機器にインストールしておく方が良い。
- ☆タブレットPCを最大限活用するためには、無線通信環境が必須。特別な設定や準備なしに、いつでもどこでも校内で使用できるように環境整備を進めていく。